

はじめに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17851

はじめに

本書は、金沢大学連携融合事業「日中両国における無形文化遺産保護と新文化伝統創出に関する共同事業」の平成19年度における取り組みの一つとして、平成19年10月6日に連携先の金沢市金沢能楽美術館と共同で開催した、シンポジウム「金沢が育んだ加賀宝生の魅力——無形文化遺産の継承を考える——」の報告書である。連携先の金沢市とは、本事業の概算要求段階から国際文化課歴代課長の御理解のもと、岡田宜之文化施設整備室長（当時）と連携の在り方を協議し、その後は平成18年10月に開館した金沢能楽美術館（開館以前はその準備室）を拠点に、関係者が互いに行き来して情報交換を重ねてきた。

その過程で、平成18年12月9日、金沢大学角間の里で開催した金沢大学無形文化遺産研究会に、長年、金沢市で文化財保護行政に関わって来られた河原清氏（現在、国際文化課長。現役の能楽師〈幸流小鼓方職分〉でもある）を招請し、金沢市における無形文化遺産の保護と活用に関する取り組みの概要を御報告いただいた。この研究会では、石汝傑氏（熊本学園大学外国語学部教授）「蘇州の地方芸能とその魅力」、大貫美佐子氏（ユネスコ・アジア文化センター文化協力課長）「アジア地域における無形文化遺産条約推進の課題」の2本の報告も行われ、石・大貫の両氏には平成19年度から客員教授、同准教授として、本事業に参加していただいている。

また平成19年2月20日には金沢能楽美術館の藤島秀隆館長・石蔵茂幸副館長及び中国蘇州市との交流を担当する国際文化課の山本暁主任主事に来学願い、本事業に関連する分野での国際交流や文化財保護の活動について、これまでの実績を御紹介いただくと同時に、本事業を展開する上で有益な種々の示唆を頂戴した。

さらに平成19年3月18日には、大学コンソーシアム石川主催の「日本海シンポジウム：鼓動する未来へ」（石川県立音楽堂邦楽ホール）に、金沢大学日中無形文化遺産研究会も共催の形で参加して、研究会構成員の木越治を中心にシンポジウム全体を企画し、雅楽・能囃子事・狂言・和太鼓の奏演などと共に、研究会構成員の中村慎一・上田望が研究会の取り組みを広く一般に紹介することを行った。

こうした準備活動を経て、正式には本事業の概算要求が認められた平成19年度から、研究会は本格的な取り組みを開始した。上には今回のシンポジウムに関連する部分に限って活動内容を概観したが、金沢市以外の連携先、中国蘇州大学・北京語言大学・四川大学、またユネスコ・アジア文化センターとの間でも、さまざまな形の連携を実現、模索しているところであり、11月23日開催のシンポジウム「日中両国の方言の過去、現在、未来」

をはじめとして、研究会構成員の各分野でそれぞれの成果が報告されてゆくことになる(本事業推進の状況はホームページを参照されたい)。その中で、「能楽」分野の報告書を最初に公刊するのは、連携先の金沢能楽美術館の開館1周年の時期に合わせて、記念のシンポジウムを共同で開催することを当初から計画していたからであり、最初の報告書ゆえやや詳しく、事業全体にも触れる形でここ1、2年の経過を回顧した。この間、連携先諸機関の関係者各位、そして金沢大学当局並びに久保田功文学部長には、格別の御高配、御支援を賜った。記して深く感謝申し上げる次第である。

さて、日本の中世以来の伝統芸能、「能楽」の保護・継承が、金沢では独特の展開を遂げて、「加賀宝生」という言葉が定着している。昨年10月に開館した金沢能楽美術館は、「加賀宝生」ゆかりの能面・能装束を収蔵し、公開展示するだけでなく、加賀宝生子ども塾や金沢素囃子子ども塾の活動拠点と位置づけられ、さらに能面打ち教室や各種体験講座、能楽関連講義なども随時開催、開講している。子どもや一般の愛好者を対象とする技芸継承



【金沢能楽美術館外観(金沢市提供)】

の場としても機能している点では、金沢能楽美術館は本事業の題目に掲げる「無形文化遺産保護と新文化伝統創出」を考えるにふさわしい施設であり、考える材料が「加賀宝生」には豊富にあると言える。

今回のシンポジウムでは、その金沢能楽美術館と共同で、「加賀宝生」の内と外から魅力を探り、無形文化遺産の継承を考

ることにした。そのために適任と思われる方々に、金沢能楽美術館とも相談の上、共同で講師を依頼した(会場は金沢市から金沢21世紀美術館のシアター21を御提供いただいた)。具体的な発言内容は以下のシンポジウム本体を参照されたいが、講師紹介(当日は金沢能楽美術館作成の講師プロフィール・パンフレットを配布した。講演順)を兼ねて、企画時に期待した役割を略述し、シンポジウム本体への導入の言葉としたい。

西村聡(金沢大学文学部教授)は、「能楽」の文学・歴史を専門とする。今回は「加賀宝生」という言葉の定義を、金沢市記念文化財の指定理由書を材料に再検討し、無形文化遺

産の継承に何が必要かという問題提起を役割とする。

諸貫洋次氏（独立行政法人日本芸術文化振興会国立能楽堂企画制作課企画制作係主任）は、「能楽」を国の立場で普及振興する最前線、国立能楽堂において、公演の企画立案、交渉等を担当している。金沢大学宝生会の出身で、「加賀宝生」の伝統が若い世代に継承される現場を知り、国立能楽堂では日々、舞台と客席の両方の生の声を聞く、という同氏ならではの経験を踏まえた報告をうかがう。

高桑いづみ氏（独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部音声映像記録研究室長）は、「能楽」の音楽・演出を専門とし、著書に『能の囃子と演出』（音楽友之社）などがある。無形文化遺産部に所属し、音声・映像の記録研究を担当している。その仕事の具体例は、宝生流最長老、今井泰男師の番謡連続録音の報告（『芸能史研究』173号）に活写されている。今回は金沢ゆかりの囃子を中心にお話しいただく。

渡邊容之助氏（宝生流シテ方。金沢能楽会副会長）は、御自身が重要無形文化財総合指定日本能楽会会員、という現代「加賀宝生」の重鎮である。金沢大学宝生会もその草創期から指導していただいている。金沢の能楽を未来へどう継承するか、日夜奮闘して来られた経験に基づく、また半世紀前の「加賀宝生」を知る生き字引としての、貴重な証言が得られるはずである。

藤島秀隆氏（金沢能楽美術館長。金沢工業大学名誉教授）は、「能楽」の文学・歴史・民俗を専門とする。中世説話・物語、加賀・能登の伝承に関する著作も多い。金沢能楽美術館初代館長として、その運営の中心となり、種々の企画を実現しつつ、入館者と直接向き合い、「加賀宝生」の魅力の普及に努めて来られた。今回は、全体の進行もお引き受けいただいた。

（西村 聡）